

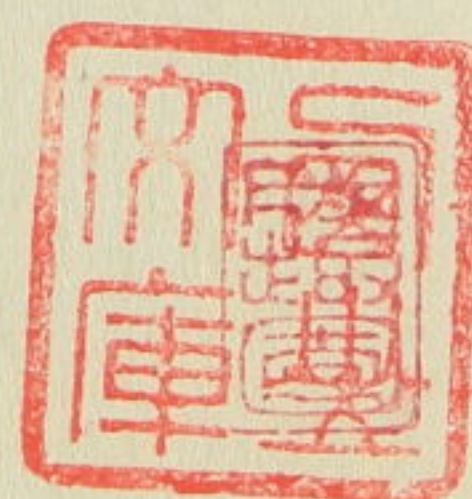


伊勢物語新釋
五

特別
イ 4
3163
203(5)



中
頁
14
3163
203(5)





伊勢物語新釋五十九卷

六十八段

ひう男けりてそそれ男いせのふよりけ使はれり

時の使とて勅使をつうて将をさへて鳥をさへて

事なり播磨美作遠江備中備後などのふくへお使あり

ついで三代実録よえて臂鷹塔タ大行拂野禽又ハ套鷹

鷄拂取野禽なれはなれおさるるさへて拾穂抄は守は

ふはさへてひるやうをえさへてさんたふは時の使とてはる

るあふへへふうげはやうをえ

ふれおさるる人のみや常のけふいよりハ山人よりい



[illegible][illegible]

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百。

[illegible][illegible]

又男

いゝねんちんさへいゝねん袖の後のちんちんは後で
そねんちんちんちん袖のちんちんは後で
ちんちんちんちん

infant for me in the morning?

七十五段
むう二條の店にまゝ玉子のやうにとやける時

これ二条店の中へ店をうつたまりてうひたまひてみるはまゝ
よかりたひいてまゝの清もあつちけるやうなうへ

二條の店を原氏よりたりませばその氏はおや神天児屋命哉
まづうゝ大原野社まづぐへ氏神ハ氏の村や邪をい

るくされる縁を氏子又て氏人ともいつて天兒屋命ハ遠足
のねむれ氏神とておぼえしものゝうられしひきとに
まつてけりしを奈良の都おのみこととていふ今ふたつ
て又大原野よりまつて大鏡の七巻にええり
近侍つるふさむいひるおんくたつりつては法車
よりたつりて後てまつけり

を讀つるよはむいひるおんくたつりつては法車
よりたつりて後てまつけり
三代実録二十七の巻に從四位下行右馬頭在原朝臣業平為
右近衛權中將とえり貞觀十七年の事
○たつりつて後てまつけり
塗ま二本よき

大原やよはのねむれ氏神とておぼえしものゝうられしひきとに
まつてけりしを奈良の都おのみこととていふ今ふたつ
て又大原野よりまつて大鏡の七巻にええり
近侍つるふさむいひるおんくたつりつては法車
よりたつりて後てまつけり
三代実録二十七の巻に從四位下行右馬頭在原朝臣業平為
右近衛權中將とえり貞觀十七年の事
○たつりつて後てまつけり
塗ま二本よき

文徳天皇崩たまひて山城國葛野郡田邑に葬まけりその陵を田
村の陵と云ふなりて田村の常とゆふにやなり多哥幾子右大
臣従二位良相公の侍ひたりて嘉祥三年乙未七月に女御と云ふ
またまひたり

天安二年十一月十四日從四位下藤原朝臣多可幾子卒らるる
三代実録一の卷より見えたり
おちのみとごとくハ七日のちけり
作佛事ものゆへ安祥寺ハ齊衡二年ハ定額に額より文
徳実録より見えり
いふにハすに寺よりぞ
ほりん

○ 市井文 吉本よりたゞ

捧けおきうきほうもちといふておぼしうに
れきとんえり
とちりけハ持おのゑちちちちといふ

そこげくのさげぎのそふのねはつけて盡れ弟よたてられん
もろゝは盡れまふようぢなまゝゝやうになんらんゝゝ

高きつゝ考ふむうけをのぞむの枝ははるかに伸び
又ハヤシ人なるものハたゞはたゞとてするものにて今の世はふ
すゑにともと回らんぞへきまへ天皇の御弟又ハ帝の御使乃

あづ—物言なまのねま—いさく人の信はよき神はまこといそで
おのこもよりおののまにけなまにいひし人のいそいそとす
きいすちのこもなまのまにけなまにいひし人のいそいそとす
おのの信をいひおのの信をいひし人のいそいそとす
あゝせなまのまにけなまにいひし人のいそいそとす
あゝせなまのまにけなまにいひし人のいそいそとす

けふふれ大將出て人よたづなりしやう

てぞうりい臆れよまをたづなりしやう
こゝろといつたぞうりい臆れよまをたづなりしやう
字をたづなりしやう
延喜の日本紀の竟宴と思兼神をよめる字
なまのたづなりしやうをよめる字

けふふれ大將出て人よたづなりしやう
もものまをたづなりしやう
おののまをたづなりしやう
あゝせなまのまにけなまにいひし人のいそいそとす

○出て人よ金本より人よ金本より

けふふれ大將出て人よたづなりしやう

みものまをたづなりしやう
おののまをたづなりしやう
あゝせなまのまにけなまにいひし人のいそいそとす
黙在ナホアル不得エスなまのまにけなまにいひし人のいそいそとす
るいほもせいでたづなりしやう

してちぢふいあゝもねゝとてん

三條のみはみゆれせし時

貞觀八年三月二十三日己亥鸞輿幸右大臣藤原朝臣良相西
京第觀櫻花喚文人賦百花亭詩預席者四十人云觀宴竟
日賜扈從百官祿各有差夜分之後衆輿還とらう三代實錄
第十二の卷に云ふやう此百花亭は三條北朱雀西に在り拾芥
抄に云ふ良相公を西三條右大臣とせむと三條の太清ゆれとま
けきうの事とてりふき

此のふけふけのそとにありふけとねしうけ石をけりき
うへよふさかむとの石あるのそとを大ふけり時のけりめき

て良相公へけ人のまうーふふ里の後の大溪は慈母の道とてさ
との溪とてふふとてけふちそとをせぬとてさうけり石のけり
けりてそとけふのそとけりてふふとてふふとてふふとて

大みゆれの後をけりーかてはる人のみさうーのまへけみそに
すゑふりーをけりてふふとてふふとてふふとてふふとて
此のふけふけは遠く大みゆれにねられてきてきてきてきて
きてきてきてきてきてきてきてきてきてきてきてきてきて
けりてふふとてふふとてふふとてふふとてふふとてふふとて
けりてふふとてふふとてふふとてふふとてふふとてふふとて
のせよををのふふとてふふとてふふとてふふとてふふとて
あけらてふふとてふふとてふふとてふふとてふふとてふふとて

子
ん
よ
め
の
心

七十八段
むし氏の申ふみこうふいまつうるる

序ふやまゝにふりかへるゝ

伊予守と伊予守のいふこととて、
 七日のねなどいふこととて、
 数親王の外祖父行平朝臣の方なるゆゑといふ
 辛五十一なれば

ずうにちひろくしけんけをうきついで夏をたぬくもくせにふき
 牡丹みこをゆはなぐさしるもめて、いわにのあつらひ世はあづる
 しねも尋ある竹をうきてほすいろなればやぶ氏族のふれぬ此の
 ずうにちひろくしけんけをうきついで夏をたぬくもくせにふき
 せびてほくしけんけをうきついで夏をたぬくもくせにふき
 のうきしけんけをうきついで夏をたぬくもくせにふき

五十四まで薨——たまう小野よりいふにゆきよ小野よりいふに
山よりいふにいふにたまう小野よりいふに幸の標はた
はくふにたまう小野よりいふに幸の標はた

ちひなみはるかにしづむのうきもいふにまじりて
 く西のふらぐ人きもちをわたりなごころをわたり
 ていつく日本後紀七の巻より山崎津難波津とあるべしこれ
 なるもても大津あるものなりといふ
類聚国史百七十三卷への遣使
減左右京及山崎津難波津酒
 家産といふ
 ええい
 さてこれせよ清子の特別業のさけりかきんといふハ常
 のものなるなりなりかんあなごれとまじりの桜おぬす
 ふハ例としてねばいふまけなく

その時おけるのみなりける人をてはみあてねうさう時
せいてくくあやなづれを甚くの名をすまなづさ

此頃のすゝめは古今集よりえ又ハ土佐日記よりさうもうて此の
ころのくハ業平の歌あるにうれをいふてその人乃名わかれ
よさうといふがれきうれ

かのひはるにうきとてほろろとわづらひてうきとて
 おひはるにうきとてほろろとわづらひてうきとて
 ゆうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて
 まねにうきとてうきとてうきとてうきとて
 うきとてうきとてうきとてうきとてうきとて

えつとゆくその後い昔をわいやりてえきば面白うけ。あこさう
なる思よ。松のあどもほり中のをよ。梅の花ふけ。あこさう
人はいそ。是い。あこさう。あこさう。あこさう。故惟喬のみ。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。

世の中はたえてはく。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。

あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。

○あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。

あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。
あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。あこさう。

とぞえられば此方をみこめしづーれまゝてぞーえまゝ
そゞ此のほうつひはとめいつうまはまうそれぞいー
此方をみよめぞいましてゝゝ通じぬらんけぢあやう
ぢゝ感づつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
眩暈は惟高のみをハけぢなれはつゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
沈酔はたまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○とぞえられば此方を 金本うたが

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

男はあつてもやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

八十三段
むう 男うけとてや ながく 母さんみこなり ちやうど
母も 思ふと ありすゝ 経ひなり

やしとて官位のいきまをひけより
 けふはつたなふちへいふ今集
 お壬生、忠峯の長き身はいや
 らく年ぬきもむねさうに
 いともたかきおづろのころそ
 出く右衛門府をさうきて業を
 お母のめりみゝハ桓武天皇第八
 の皇女よ伊登内親王とす
 さそきをもめていてふかしん

○みこなり久家 塗ま二本よりび

子いふはなつてゝねはまうてゝねはまうてゝえりて
ねはまうてゝねはまうてゝねはまうてゝねはまうてゝ
ううはなつてゝねはまうてゝねはまうてゝねはまうてゝ
ねはまうてゝねはまうてゝねはまうてゝねはまうてゝ

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise, written in a cursive style.

東より土をいさるればなるなりてゆくべき道なれどふに草畑く

[illegible]

乃て之をほられちりてなきけつる人ハかぞある
 むしほうまつりくぞくなるぜんなるはあまの
 あかりてむ月なればきこづつと大馬路いひう
 俗なる後ゆありとハ俗人とはばをさうするなりむ月
 なれざるもつとハ西月あれば平生とハ是んとてすみきをたす
 きそへきこつハ幸小長あるをさゆへ續日本紀詔詞又此食
 タニアマノシタヲナデタミニメケミタフコトハコトタツニアラス
 國天下^乎撫賜慈賜事者辭立不在とほも常よりいふ。殊
 なるわざよあひびきまこと考へ合すべし辞ハ借字とするめとい
 ちぢぶらぬぞとていひひきすやあひびき人あいて雪ふ
 つらあひびきうとて歌よみけふ

[illegible]

かゝるにせむそれをもてそのちうにあらうとて決意のありけりぞ
 ありといふ拾遺古意をきけつるぞわづらあるといふも更なるはう
 といふもそのちうにせむそれをもてそのちうにあらうとて決意のありけりぞ
 といふもそのちうにせむそれをもてそのちうにあらうとて決意のありけりぞ
 といふもそのちうにせむそれをもてそのちうにあらうとて決意のありけりぞ

とよみうたれぞみこころうろほつまがうたまうて後そぬぎてんかん
うさくら

八十五段
ぢめらうゆきうくえでふけてき衣をぬぎてたまふらん
むうとわらわ男はを女をういいうるをねのくおやあらはれ

そつみそふしうてやううふはて女おきようねにやう
とぐんふしうふれ男うとふみそやううふしうふれん

[illegible]

○女のきょうりゃくあつとけんようは、
塗去二本よきう
うきをみて 同二本ようてなんをうきう
いふおとこさん
同二本ようてくし

[illegible]

八十六段
 男はけいふうばと郡あやの里はきりきり
 男をさるものなむい女はあきまふまふはあきあきほくは
 男をさるものなむい女はあきまふまふはあきあきほくは
 男をさるものなむい女はあきまふまふはあきあきほくは

此をむろいでくはまらうとふくせんふくせんを

○なづのは 塗本うたがふ今ねれなははものいほはなづる
女うよりまみさをとほきまよりてかしてはみほいて生
づるそれういよかくなり

きつねハ杯のいけさねをうつねとくすて飲くらざるをいふ番を
いふとて万葉集十六のまねれど分は所^ハ聞多^シ祢^ニ乃^ノ机^ツ之^ノ嶋^シ能^シ
小螺^シ乎^ミ伊^イ拾^シ持^チ來^キ而^ニ石^シ以^テ都^ツ追^キ伎^ヤ破^ハ夫^フ利^リ早^ハ川^カ尔^ニ洗^ハ濯^ス幸^ニ鹽^シ京^キ
古^コ胡^コ登^ト毛^モ美^ミ高^カ坏^フ尔^ニ盛^セ机^キ尔^ニ立^タ而^ニ母^ハ尔^ニ奉^ホ都^ツ也^ニ目^メ豆^ヅ兒^コ乃^ニ肩^ケ
父^ハ尔^ニ獻^セ都^ツ也^ニ身^ミ女^メ兒^コ乃^ニ肩^ケとあるをそをばちもる保まると
いふそれいふてやまらうとのあへおしん又さやうやて

父母はなりしをうふはらうとさうやいふまはあべい
そをねえそがそおまいるかねはいてらうあんのうらぬいめ
又するあなまへ

○おしんそれかそたかくなり 塗本はまらう

わらふふらうははねいそとそくふんはさしはらうと
そらみそ海神に古事記は生海神名大綿津見神とあるこれ
かき人のかきそははねいむとそら枝なむれとて海神のそに
ハ藤をさそれれめかきよりていふそはねとハはねとておさる
いそいにつくそねれく大切はするそ入神のそいゆとそは藤と
そいふそはしそそこの海神のそにそいふと大切はする藤を

もあつたふりやうにそのおもさへいふてはあつたかちてはあ
くはあつたふりやうにそのおもさへいふてはあつたかちてはあ
あつたふりやうにそのおもさへいふてはあつたかちてはあ
あつたふりやうにそのおもさへいふてはあつたかちてはあ



